

新装版

上田信

画集



キャラクターメカニック
・サンライズ編


新装版

上田信

画集



キャラクターメカニック
・サンライズ編



1949 (昭和 24) 年、青森県蓬田村に生まれた上田信は、母の勧めにより中学卒業と同時に上京して小松崎茂に師事。最後の内弟子として 5 年間小松崎と生活を共にし、作画を学びました。その後、トイガンメーカーの宣伝部に就職し、2 年で独立。1969 (昭和 44) 年にタミヤ 1/100 ミニジェット機シリーズで初のボックスアートを担当。以来、半世紀にわって、プラモデルや玩具のボックスアート、書籍のカバーイラスト、雑誌の挿絵等を手がけ、今もなお最前線で活躍するイラストレーターです。

上田は知る人ぞ知る軍装品コレクターであり、ミリタリー研究家でもあります。作品はミリタリー系の印象が強く、その武器、戦闘シーンの緻密な描写は高い評価を受けており、著作の『コンバット・バイブル』全 4 巻 (1992 ~ 1999 年、日本出版社) は韓国や台湾でも翻訳出版されて大きな話題を集めました。しかし、ミリタリー以外にも漫画、アニメ、架空戦記、空想科学ものまでジャンルを問わず、また師である小松崎の様式を受け継ぐ挿絵画的作品から、エアブラシを用いた精密画、カラフルな子供向けイラスト、モノクロの線描画まで、幅広い表現の作品を発表し続けています。特にアニメや特撮関連のイラストは上田の 1980 年代の活動の重要な部分を占めています。

この 1980 年代は日本のロボットアニメがひとつの頂を形成していた時。「機動戦士ガンダム」や「超時空要塞マクロス」など今に続く巨大コンテンツの他、「伝説巨神イデオン」や「太陽の牙ダグラム」、「戦闘メカザブングル」、「聖戦士ダンバイン」、「装甲騎兵ボトムズ」、「重戦機エルガイム」、「蒼き流星 SPX レイズナー」など現在も多くのファンの記憶に残るロボットアニメが生まれ出された“奇跡の時代”でした。プラモデルや玩具、アニメ雑誌、少年誌の特集記事から様々な商品のパッケージまでロボットイラストの需要が増したことで上田の仕事の方向性も決して無縁ではありません。小松崎茂、高橋義之、梶田達二、長谷川政幸、石橋謙一、増尾隆幸、開田裕治など当時活躍していた綺羅星のごとく居並ぶイラストレーターの中でも、上田は小松崎の筆法を継承しながらも、そこに独自の柔らかな筆致を加え、機械の身体化、まさにメカニカルなものへ生命を吹き込むかのような印象を与えるイラストで人気を博しました。

本書はそうした上田のキャラクターイラストを一望できる初の画集です。上田信の仕事の総体を読み解く上で不可欠なピースがここでひとつ揃ります。その作品の魅力と特徴を存分に味わっていただきつつ、1980 年代ロボットアニメの多様性と、日本文化に与えた影響の大きさについても、あわせて感じ取っていただければ幸いです。

编者

上田信インタビュー／星を継ぐ者



—上田さんの長いキャリアの中で、これまでキャラクター系の画集がなかったことはむしろ意外でした。せっかくの機会なので、いろいろ伺いたいのですが、まず絵描きを志したきっかけから……。

上田 僕は小さい頃から絵を描くことが大好きで、近くの駅にSLがいつも止まっており、その魅力にはまったのが機械ものを好きになった原体験だったように思います(編注：上田氏は昭和24年、青森県生まれ)。キャラクターものは同じ頃、『少年』注1や『少年ブック』注2を夢中で読んで、『少年』に掲載されていた『鉄人28号』注3を真似て描いていました。今考えればそれが絵描きを志したきっかけと言えるかも知れません。

—はじめはキャラものだったんですね。

上田 そう、最初は「鉄人」で、だんだんと雑誌に載っている軍艦や飛行機といった実際の機械に興味が広がっていき、いつも雑誌にかぶりついて模写してましたね。

—絵ばかりを描いている中学生の息子を小松崎茂先生注4に預けようと考えたのはお母様か？

上田 そうです。少年週刊誌に掲載されていた小松崎先生や高荷義之さん注5、中西立太さん注6の口絵や挿絵を真似て絵ばかり

描いてまったく勉強しないから、母が小松崎先生に手紙を書いた。「うちの息子が先生の絵ばかり描いているので面倒みてくださーい」って(笑)。ホントは小松崎先生の絵ばかり描いていたんじゃないんですけどね、たぶん母はそう書いたんだと思う(笑)。

—返事が来たんですか？

上田 ちゃんと「一度遊びにいらっしやい」と返事があったの、びつくりですよ。でもあとから聞いたら根本圭助さん注7が返事を書いていたという(笑)で、中学3年生の正月休みに柏の先生のアトリエを訪ねてね。それで決まっちゃった。中学を卒業してすぐ上京しました。

—お母様は趣味でねぶたの風絵を描かれていたんですね？ 絵を描くことに対してかなりの理解があったんですね。でも、中学生といえはまだ子供じゃないですか。青森で生まれ育って注8、いきなり一人で上京って不安はなかったんですか？

上田 まあ東京と言っても柏。あの頃の柏はホントに田舎だったから(笑)。「都会に来た！」みたいな意識は全くありませんでした。

—東京に対する憧れは？

上田 まったくなかった(笑)。街に憧れたんじゃないって、先生に憧れていた。そこで好きな絵を描いていられれば良いかな、と思いました。

—それで小松崎先生の「最後の内弟子」になった、と。

上田 ああ、弟子はみんな独立して誰もいませんでした。だからアトリエにおいてもらえたのかも。

—当時は給料制だったんですか？

上田 いやいや、弟子なんてお給料もらえないですよ。たまにお小遣いをもらう程度でした。

—小松崎先生の作画のお手伝いもされていたんですか？

上田 たまにね。背景の宇宙の星を描いたりとか、絵の本質に関係ないところをちょこっと手伝うくらい。(さつと雑誌を取り出し)でもこういうものもあるんだよ(挿図1)。先生が下絵を描い



挿図1：「地球大改造計画」(『少年画報』1968年?月号、少年画報社)

て僕が筆を入れたんです。でもね、一番の要となるドリルのギラッとしたところだけは先生が最後に仕上げた。で、サインを入れるの。でも、こんなことは、どうにもならないくらいに忙しい時だけ、本当に稀なことでした。

—小松崎先生のところには何年くらいいらしたんですか？

上田 中学卒業から二十歳までの5年間。別に5年って決まっていたわけじゃないけど、もうそろそろいいかな、って(笑)。先生は手取り足取り絵を教えてくれるわけじゃない。ようは盗んで覚えるということ。絵の手伝いで横にいると先生のテクニックがよく解るんです。さっきのドリルの描き方なんて、横で見ててなるほどと思った。でも先生の仕事をずっとそばで見たいわけじゃなくて、出来上がった絵を見て色々と吸収した方が大きかったかな。先生のところには最後の頃には出入りしていた編集の方に「描いてみる？」と言われて、雑誌のカットの仕事を少しずつやるようになっていました。例えば、こういうもの。(挿図2)

—あれ？でも名前が違いますよ。「津軽国夫」になってます。

上田 それペンネーム(笑)。先生が付けてくれたの。いくら青森生まれでも「津軽国夫」はないよねえ(笑)。だからペンネームを使ったのはそれが最初で最後。要するにこの恐竜を描いただけ、それからずっと「上田信」という名義で描いてます。

挿図2



もう1点、これは雑誌「少年」に頼まれて描いたもの(挿図3)。当時、光文社の「少年」編集部でアルバイトしていた内田嘉正さん注9が先生の原稿を取りに来てただけ、あ



挿図3



挿図4：「ドラッグスカラー特集ウルトラ最終兵器50万人のれる!ウルトラ・ヤマト」(『少年ブック』1966年?月号、集英社)

る時私にも依頼があつてその時に描いたもの。内田さんはその後、バンダイ模型(当時)に入るんだけど、その縁があつてガンブラのボックスアートの依頼が来たんですね。

ちなみに、この絵がイラストレーター上田信としてのデビュー作(挿図4)。プロ1作目ということですね。2色で描いています。

—なるほど、そういう経緯があつたんですか。小松崎先生のところを卒業されてからはモデルガンメーカーに就職されたんですね。

上田 まだ絵描きとして食っていけるだけの実力もなかったし、サラリーマンだったら食うに困らないだろうから、どこか就職決まったら独立したいよ、と小松崎先生に言われていたんです。そしたら運良く、MGCというモデルガンメーカー注10の宣伝部でイラストレーターとして雇ってもらえることになった。

—結局サラリーマン時代は2年なんですよね、短いんですね。

上田 だつてもう勤めていた頃からボックスアートや雑誌の仕事もしてたから(笑)。だんだんそっちが忙しくなつて会社に行つてられなくなつちゃつた(笑)。

—そのプラモデルのボックスアートですが、初めはバンダイではなくタミヤの……

上田 独立前の1/100「ミニジェット機」シリーズ。プラモデルのボックスアートはそれが最初。当時タミヤのデザイン課には小松崎先生の弟子だった大西将美さん注11がいて、彼からの依頼でした。その後1980年代のはじめには、小松崎先生のマネージャー的存在だった根本さんが立ち上げた「根本アートセンター」から、キャラクターものの仕事をたくさん請け負いました。

—「根本アートセンター」名義のボックスアートは当時のアオシマのキャラクタープラモなどに多く見られますが、作品は共同制作だったんですか？



バンダイ 1/250「ランバ・ラル特攻！」(旧 Ver.) ボックスアート 1981 ボード・水彩 31.5×45.8



バンダイ 1/250「ランバル特攻!」ボックスアート 1981 ボード・水彩 36.5×51.5

「機動戦士ガンダム」は1979（昭和54）年4月から1980（昭和55）年1月にかけて全43話が放映されたテレビアニメ。制作は日本サンライズ（現、サンライズ）。総監督富野喜幸（現、富野由悠季）、キャラクターデザイン安彦良和、メカニカルデザイン大河原邦男による、それまでのロボットアニメにはなかったリアリティのある世界観やロボットの設定、勧善懲悪を越えた物語づくりなどが高年齢層に支持され、本放送時は視聴率の低迷で打ち切られたものの、再放送や映画化をきっかけに爆発的なブームとなり、その後のロボットアニメのひとつの規範ともなっていた。バンダイから発売されたプラモデル「ガンブラ」も社会現象となるほどの人気を博し、現在もなおプラモデルというホビーマニアの主力アイテムとして君臨している。ガンダムそのものも数多くの続編が作られ、アニメ、SFといった枠を越えて、現代日本の文化を語る上で重要なキーワードとなっている。

ガンダムの立体物は放送当時クローバーから低年齢層向けの玩具が発売されていたが、ファンの要望を受け、バンダイが1979（昭和54）年12月にプラモデルの商品化権を獲得、放送終了後の1980（昭和55）年7月19日にベストメカコレクションシリーズの1点として1/144「ガンダム」が、続いて1/100スケールのガンダムも発売される。シリーズは順調に続き、主力MSが次々と発売されていったが、映画化が決定した1981（昭和56）年の年明けからブームに火がつくと、品薄状態が続くほどの売り上げを記録した。劇中に登場したMS、MA（モビルアーマー）はほぼ商品化され、ついにはアニメに登場しないMSまでキット化。そして、新たに設定を起こした「モビルスーツバリエーション（MSV）」シリーズへと展開していった。そのキットの仕様やボックスアートの移り変わりを追うと、メインとなる購買層の年齢が高くなっていったことははっきりと読み取れるであろう。

上田は「情景模型」シリーズでガンブラのボックスアートに参加して以降、主力イラストレーターとして活躍。特にMSVシリーズでは石橋謙一らとともにその才能を存分に発揮した。







バンダイ 1/100「リアルタイプ・量産型ゲルググ」ボックスアート 1982 紙・水彩 46.8×31.4





バンダイ 1/144 「マゼリアアタック」ボックスアート 1982 紙・水彩 30.2×42.9



オデッサ作戦 (『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (上)』(学研) イラスト 2007 紙・水彩 36.4×51.4



ア・バオア・クー (『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (下)』(学研) イラスト 2007 紙・水彩 36.4×51.4

作品リスト

頁	作品名	制作年	材質・技法
8	バンダイ 1/250「ランバ・ラル特攻！」(旧 Ver.) ボックスアート	1981	ボード・水彩
9	バンダイ 1/250「ランバラル特攻！」 ボックスアート	1981	ボード・水彩
10	バンダイ 1/250「ジャブローに散る」(旧 Ver.) ボックスアート	1981	ボード・水彩
11	バンダイ 1/250「ジャブローに散る」 ボックスアート	1981	ボード・水彩
12	バンダイ 1/250「テキサスの攻防」(旧 Ver.) ボックスアート	1981	ボード・水彩
13	バンダイ 1/250「テキサスの攻防」 ボックスアート	1981	ボード・水彩
14	バンダイ 1/250「ア・バオア・クー攻防」(旧 Ver.) ボックスアート	1981	ボード・水彩
15	バンダイ 1/250「ア・バオア・クー攻防」 ボックスアート	1981	ボード・水彩
16	バンダイ 1/144「武器セット」	1981	ボード・水彩
17	バンダイ 1/144「ドダイ YS」	1981	ボード・水彩
18	ガンダム (バンダイ『模型情報』1981年8月号表紙)	1981	ボード・水彩
19	シャア専用ゲルググ (バンダイ『模型情報』1981年10月号表紙)	1981	ボード・水彩
20	量産型ザク (指揮官タイプ) (バンダイ『模型情報』1982年2月号表紙)	1982	ボード・水彩
21	バンダイ 1/144「ガンタンク」 ボックスアート	1981	ボード・水彩
22	バンダイ 1/100「リアルタイプ・量産型ザク」 ボックスアート	1982	紙・水彩
23	バンダイ 1/100「リアルタイプ・量産型ゲルググ」 ボックスアート	1982	紙・水彩
24	バンダイ 1/100「リアルタイプ・ガンキャノン」 ボックスアート	1982	紙・水彩
25	バンダイ 1/100「リアルタイプ・ジム」 ボックスアート	1983	紙・水彩
26	バンダイ 1/100「リアルタイプ・旧ザク」 ボックスアート	1983	紙・水彩
27	バンダイ 1/144「マゼラアタック」 ボックスアート	1982	紙・水彩
28	バンダイ 1/60「FA-78-1 フルアーマーガンダム」 ボックスアート	1984	紙・水彩
29	バンダイ 1/60「MS-14C ゲルググキャノン」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
30	バンダイ 1/144「MS-06K ザクキャノン」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
31	バンダイ 1/100「MS-06R ザク II シン・マツナガ大尉機」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
32	バンダイ 1/100「YMS-09 プロトタイプドム」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
33	バンダイ 1/144「RGM-79 ジムスナイパーカスタム」 ボックスアート	1983	紙・水彩
34	バンダイ 1/100「MS-06R-2 ザク II ジョニー・ライデン少佐専用機」 ボックスアート	1984	ボード・水彩
35	量産型ザク (講談社ポケット百科『機動戦士ガンダム MSV 1 ザク編』) 表紙イラスト	1984	紙・水彩
36	Zガンダム (講談社用) イラスト	1985	ボード・水彩
37	百式 (『ホビージャパン』1986年1月号、ホビージャパン) イラスト	1985	紙・水彩
38	バンダイ 1/144「MSZ-010 ZZガンダム」 ボックスアート	1986	ボード・水彩
39	バンダイ 1/144「MS-09G ドワッジ」 ボックスアート	1986	ボード・水彩
40	ZZガンダム (『テレビランド』1986年4月号、徳間書店) イラスト	1986	紙・水彩
41	ZZガンダム (『テレビランド』1986年5月号、徳間書店) イラスト	1986	紙・水彩
41	ZZガンダム (『テレビランド』1986年6月号、徳間書店) イラスト	1986	紙・水彩
42	バンダイ カワルドスーツ「リック・ディアス」 ボックスアート	1985	紙・水彩
42	バンダイ カワルドスーツ「リック・ディアス」 ボックスアート	1985	紙・水彩
42	バンダイ カワルドスーツ「リック・ディアス」 ボックスアート	1985	ボード・水彩
44	バンダイ 1/48「ダンバイン」(未採用)	1983	ボード・水彩
45	バンダイ 1/72「ダーナオシー」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
46	バンダイ 1/72「ドラムロ (バーン・バニングス用)」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
47	バンダイ 1/48「ドラムロ」 ボックスアート	1983	ボード・水彩

48	タカラ ビギナーズコレクション 1/80 「ダグラム」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
49	タカラ ビギナーズコレクション 1/144 「アビテート F44A テキーラガンナー」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
50	タカラ ビギナーズコレクション 1/92 「ソルティック H404S マッケレル」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
51	タカラ ビギナーズコレクション 1/93 「ソルティック H404S マッケレル」 ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
52	タカラ ビギナーズコレクション 1/80 「ソルティック H102 ブッシュマン」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
53	タカラ ビギナーズコレクション 1/80 「ソルティック H102 ブッシュマン」 ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
54	タカラ ビギナーズコレクション 1/144 「アビテート F35C プリザードガンナー」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
55	タカラ ビギナーズコレクション 1/144 「アビテート F35C プリザードガンナー」 ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
56	タカラ ビギナーズコレクション 1/120 「ソルティック HT128 ビックフット」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
57	タカラ ビギナーズコレクション 1/120 「ソルティック HT128 ビックフット」 ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
58	タカラ ビギナーズコレクション 1/144 「アビテート F44D デザートガンナー」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
59	ダグラム (西武デパート催事用) イラスト	1982	ボード・水彩
60	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルテック H8 ラウンドフェイス&マベリック」 ボックスアート	1982	ボード・水彩
60	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルテック H8 ラウンドフェイス&マベリック」 ボックスアート下絵	1982	ボード・水彩
61	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「トレーラー ブロムリーアイバン DT2」 ボックスアート	1982	ボード・水彩
62	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10B ブロックヘッド」 ボックスアート	1982	ボード・水彩
62	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10B ブロックヘッド」	1982	
62	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10B ブロックヘッド」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
62	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10B ブロックヘッド」	1983	
63	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10C ブロックヘッド X ネブラ対応型」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
64	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルティック H102 ブッシュマン」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
65	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルティック H404S マッケレル」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
66	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルティック H8 ラウンドフェイスハンダライダー付」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
67	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「サバロフ AG9 ニコラエフ」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
68	タカラ 1/35 「ATH-14-WP スタンディング・タートル」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
69	タカラ 1/35 「ATH-Q64 ベルゼルガ」 ボックスアート	1983	ボード・水彩
70	スコブドッグ (講談社ポケット百科『装甲騎兵ボトムズ』) 表紙イラスト	1984	紙・水彩
71	フィアナ	1992	ボード・アクリル
72	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『A.T.V.P.』) イラスト	1996	紙・水彩
73	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『アストラギウスの戦い』、A.T.V.P) イラスト	2001	紙・水彩
74	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『アストラギウスの戦い』、A.T.V.P) イラスト	2001	紙・水彩
75	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『MILITARY IISUTRATED THE ANSOLOSY I』、A.T.V.P) イラスト	1994	ボード・水彩
76	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『MILITARY IISUTRATED THE ANSOLOSY II』、A.T.V.P) イラスト	1994	紙・水彩
77	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『MILITARY IISUTRATED THE ANSOLOSY II』、A.T.V.P) イラスト	1995	紙・水彩
78	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『レッドショルダーファイル』、A.T.V.P) イラスト	1990	紙・水彩
79	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『S A N S A』、A.T.V.P) イラスト	1993	紙・水彩
80	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『A, T, A R M S』、A.T.V.P) イラスト	1989	紙・水彩
81	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『ユニフォームコレクション』、A.T.V.P) イラスト	1992	紙・水彩
82	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『BLALANT』、A.T.V.P) イラスト	1990	紙・水彩
82	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『装甲騎兵のエース達』、A.T.V.P) イラスト	1989	紙・水彩
83	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『MILITARY SMALL ARMS & UNIFORMS』、A.T.V.P) イラスト	1991	紙・水彩
83	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『THE,A,T』、A.T.V.P) イラスト	1989	紙・水彩
84	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『WEPONS』、A.T.V.P) イラスト	1991	紙・水彩
85	装甲騎兵ボトムズ (同人誌『B A T T A L I O N』、A.T.V.P) イラスト	1998	紙・水彩
86	超力ロボ ガラット (徳間書店用) イラスト	1984	紙・水彩
87	機甲界ガリアン (徳間書店用) イラスト	1984	紙・水彩
88	レイズナー (『ホビージャパン』1986年3月号、ホビージャパン) イラスト	1986	紙・水彩

90～92	スペースクイーン・コーラル (グフタイプ) (『ホビージャパン』1983年10月号、ホビージャパン)	1983	樹脂、リキテックス、アクリル製ヘアー
93	バンダイ 1/60 「FA-78-1 フルアーマーガンダム」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
93	バンダイ 1/60 「FA-78-1 フルアーマーガンダム」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
94	バンダイ 1/60 「FA-78-1 フルアーマーガンダム」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
94	バンダイ 1/60 「FA-78-1 フルアーマーガンダム」	1983	
95	バンダイ 1/60 「MS-14C ゲルググキャノン」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
95	バンダイ 1/60 「MS-14C ゲルググキャノン」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
95	バンダイ 1/60 「MS-14C ゲルググキャノン」	1983	
96	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
96	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
96	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
97	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
97	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
97	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
98	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
98	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
98	バンダイ 1/100 「MS-06R ザクII シン・マツナガ大尉機」	1983	
99	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10C ブロックヘッド X ネブラ対応型」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
99	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10C ブロックヘッド X ネブラ対応型」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
100	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10C ブロックヘッド X ネブラ対応型」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
100	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート T10C ブロックヘッド X ネブラ対応型」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
101	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート F44D デザートガンナー」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
101	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート F44A テキーラガンナー」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
101	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「アビテート F44A テキーラガンナー」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
102	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルティック H8 ラウンドフェイス」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
103	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルティック H102 ブッシュマン」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
103	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルティック H102 ブッシュマン」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
103	タカラ 1/144 コレクションシリーズ「ソルティック H102 ブッシュマン」	1983	
104	バンダイ 1/72 「ゼラーナ」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
104	バンダイ 1/72 「ゼラーナ」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
105	バンダイ 1/72 「ゼラーナ」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
105	バンダイ 1/72 「ゼラーナ」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
106	バンダイ 1/72 「ゼラーナ」ボックスアート	1983	紙・水彩
106	バンダイ 1/72 「ゼラーナ」	1983	
107	バンダイ 「ドラム口」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
108	バンダイ 「ドラム口」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
108	バンダイ 「ドラム口」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
109	バンダイ 「ドラム口」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
109	バンダイ 「ドラム口」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
110	バンダイ 「ドラム口」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
110	バンダイ 「ドラム口」ボックスアート下絵	1983	紙・水彩
110	バンダイ 「ドラム口」	1983	
111	スコープドッグ (講談社ポケット百科『装甲騎兵ボトムズ』) 扉イラスト	1984	紙・水彩
111	タカラ 1/35 「ATM-09-ST スコープドッグ ダウンフォームタイプ」ボックスアート	1997	紙・水彩
111	タカラ 1/35 「ATM-09-ST スコープドッグ ディテールアップタイプ」ボックスアート	1997	紙・水彩
112	TGM-79 (RGM-79T) ジム・トレーナー MSV	1984	ボード・水彩
112	MS-06Z Z タイプザク MSV	1984	ボード・水彩

112	FA-78-2 ヘビーガンダム MSX	1984	ボード・水彩
112	MS-11 アクトザク MSX	1984	ボード・水彩
113	MS-10 ベズンドワッジ MSX	1984	ボード・水彩
113	MS-17 ガルバルディ MSX	1984	ボード・水彩
113	MS-13 ガッシャ MSX	1984	ボード・水彩
113	MS-12 ギガン MSX	1984	ボード・水彩
114	バンダイ 機動戦士メカガンダム「ガンダム&旧ザク」ボックスアート	1984	ボード・水彩
114	バンダイ 機動戦士メカガンダム「ジム&グフ」ボックスアート	1984	ボード・水彩
114	バンダイ 機動戦士メカガンダム「量産型ザク&ギャン」ボックスアート	1984	ボード・水彩
115	バンダイ Zガンダムボードゲーム「宇宙要塞グリプスの戦い」ボックスアート	1985	ボード・水彩
115	バンダイ Zガンダムボードゲーム「Take off MKII」ボックスアート	1985	ボード・水彩
116	バンダイ 「if シリーズ GAME for ADULT 機動戦士ガンダム」ボックスアート	1982	ボード・水彩
116	量産型ゲルググ (『アニメージュ』1982年4月号、徳間書店) イラスト	1982	ボード・水彩
117	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「ガンダムMk. II」ボックスアート	1985	紙・水彩
117	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「ハイザック」ボックスアート	1985	紙・水彩
117	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「リックディアス」ボックスアート	1985	紙・水彩
118	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「ガルバルディβ」ボックスアート	1985	紙・水彩
118	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「ジムII」ボックスアート	1985	紙・水彩
118	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「マラサイ」ボックスアート	1985	紙・水彩
118	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「ネモ」ボックスアート	1985	紙・水彩
119	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「ギャプラン」ボックスアート	1985	紙・水彩
119	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「メッサラ」ボックスアート	1985	紙・水彩
119	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「百式」ボックスアート	1985	紙・水彩
119	バンダイ パーフェクトバリエーションコレクション「百式」	1985	
120	ゲルググ (講談社ポケット百科『機動戦士ガンダム MSV 2 ジオン軍 MS/MA 編』) 表紙イラスト	1984	ボード・水彩
120	バンダイ バイファムゲーム ボックスアート	1984	ボード・水彩
120	バンダイ コンピュータウォーゲーム1 バイファムII ボックスアート	1984	ボード・水彩
122	タカラ 魔神大集合「竜神丸」ボックスアート	1988	ボード・水彩
123	タカラ 魔神大集合「戦神丸」ボックスアート	1988	ボード・水彩
124	タカラ 魔神大集合「空神丸」ボックスアート	1988	ボード・水彩
125	タカラ 魔神大集合「バトルゴリラ1号」ボックスアート	1988	ボード・水彩
126	タカラ 魔神大集合「ゲッペルン」ボックスアート	1988	ボード・水彩
127	タカラ 魔神大集合「ツインカーメン」ボックスアート	1988	ボード・水彩
128	ガンダム	2005	ボード・水彩
129	シャア専用ザク	2014	ボード・水彩
130	量産型ザク (同人誌『BLITZKRIEG』) 表4 イラスト	1992	紙・水彩
131	アナベル・ガトー専用ザク	2000	ボード・水彩
131	高機動型ザク	2000	ボード・水彩
132	一年戦争陸装用装備『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (上)』(学研) イラスト	2007	紙・水彩
132	一年戦争陸装用装備『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (上)』(学研) イラスト	2007	紙・水彩
133	一年戦争陸装用装備『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (上)』(学研) イラスト	2007	紙・水彩
133	一年戦争陸装用装備『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (上)』(学研) イラスト	2007	紙・水彩
133	一年戦争陸装用装備『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (上)』(学研) イラスト	2007	紙・水彩
134,135	ア・バオア・クー 最期の戦い	2007	紙・水彩
136	オデッサ作戦『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (上)』(学研) イラスト	2007	紙・水彩
	ア・バオア・クー『機動戦士ガンダム一年戦争全史 (下)』(学研) イラスト	1990 / 2013	ボード・水彩

ロボット／子供／戦争

この画集の理解のために

工藤健志

本書はイラストレーター上田信が手がけたロボットモチーフの作品を集めた初の画集です。ここに収められた「ガンダム」、「ダグラム」、「ポトムズ」、「ダンバイン」といったアニメに登場するロボットはすべて戦う機械です。近年はロボティクスの発展とともに、最先端の科学技術の結晶としてのロボットや産業や医療の分野で活躍するロボットが脚光を浴びていますが、ロボットと言えば昔から男の子の「憧れ」の象徴であり、フィクションの世界で遊び、戦うための重要なモチーフでした。今でもロボットのプラモデルや玩具で「ブーン、ドドド」と空想の世界に遊ぶことは少年の一種の通過儀礼と言えますが、むしろ通過せず、そのまま大人になった人も今は多いようです。

しかし改めて考えてみると、なぜロボットは「子供のもの」という認識が強くあるのか？ そもそも「ロボット」とは何なのか。そしてなぜロボットの多くは「戦う」のか。本画集に掲載された上田作品とそのモチーフを楽しむ上での前提となる、こうした点について、簡単にまとめてみたいと思います。

1. ロボット誕生

そもそも「ロボット」という言葉が生まれたのは1920（大正9）年のこと。まだ登場して百年も経っていない新しい概念で、それは社会の工業化が進んだ20世紀ならではの「新しいヒトの形」と言えます。ロボットの初出は、1920年に出版されたチェコの文学者カレル・チャペックの戯曲『R.U.R.』。チェコ語のrobot＝労働から名付けられたロボットは、今で言うところのバイオテクノロジーによって作り出された、人間と相違のない外見を持っていました。端的に言えば、それはブルジョワとプロレタリアートの闘争を人間とロボットに置き換え、労働に価値をおく20世紀初頭の世相を風刺的に描いたものでした。工業化時代の到来にともない、満員電車で通勤し、ライン上で単調な労働をこなす人々の姿をチャペックは、人間の機械化＝ロボットというイメージへと昇華させて

いったのです（クラフトワークやYMOもテクノを当初ロボットの演奏していましたね）。ロボットという言葉はチャペックの造語ですが、同時代の芸術運動、例えば機械文明や工業化社会を賛美して機械の美を追求した「未来派」や、モチーフを分析的に捉えなおす「キュビズム」に幾何学的造形の人物像が出現するなど、そうした劇的な社会の変化は美術の動向にも大きな影響を与えました。また人類史上初の大量破壊、大量殺戮の戦争となった第一次世界大戦は負傷兵の欠損した部位を補うために義手や義足の技術を飛躍的に進歩させましたが、身体に機械が結合したそのイメージは芸術家たちに創造の刺激を与えます（芸術の革新は時に道徳をも逸脱します）。1920年代に大きな運動体となった「ロシア・アヴァンギャルド」は革命後のソビエトが目指した工業化社会のプロバガンダという側面もありましたが、幾何学的な身体表現や身体を改造して機械化するような舞台衣装、機械的モチーフで構成されるデザインなどの急進的な表現が多数生み出されました。こうした新時代の新しい身体表現が後のロボットイメージに与えた影響は無視できません。

かくしてロボットは前衛的な芸術運動や思想と結びつきながら、20世紀初頭の文化を華やかに彩るスター的存在となつていきます。その動向はすぐさま日本にも伝わり、1924（大正13）年には築地小劇場が『R.U.R.』を翻訳上演、さらには時事速報的な機能も持っていた当時の落語の演題にも早速取り上げられています。そして、1928（昭和3）年の大札記念京都大博覧会には「學天則」という日本初のロボットが出品されます。西村真琴によって制作された、空気圧によって動作するロボットですが、「天の法則に学ぶ」という名前の由来どおり、それは東洋的な思想を具現化したものでした。余談ですが映画「帝都物語」でも西村真琴と學天則は大活躍しますが、西村真琴役を実子の西村晃が演じて話題になりましたね。このようにロボットという概念は最先端の文化として1931（昭和6）年頃をピークに日本で社会的な大ブームを巻き起していきます。

一方、メカニカルなロボットイメージのルーツとしては1927（昭和2）年にアメリカで開発されたテレヴィオカル・システム、通称「テレヴィオックス」が挙げられます。ウエスティングハウス社が製造した電話回線を使って遠隔操作する装置ですが、箱型の機械に無理やり頭や手足をつけて擬人化したところ大きな話題となりました。もうひとつのルーツはイギリスで1928（昭和3）年に作られた、話せるロボット「エリック」（W・H・チャールズ製作）で、金色の鎧を身にまとうかのような洗練された造形は、まさに後のアニメに登場する戦闘ロボットの原点のようでもあります。また、1927（昭和2）年にドイツで公開された映画「メトロポリス」に登場する流線型の女性ロボット「マリア」は日本でも公開当時（1929年）から評判を呼び、その造型は「COP」に受け継がれるなど、今もロボットイメージのひとつの規範となっています。



9784499234559



1920076045004

ISBN978-4-499-23455-9 C0076 ¥4500E

定価 (本体 4,500 円+税)

